

森田先生スペシャル

我らがコミュ英担当の森田先生に、その海外経験についてインタビューを行い、特集記事をまとめました。以下がその内容です。

まず初めにグアム旅行について伺いました。

グアムへは、大学四年生のときに同じ学科の友達と、観光目的で三日間滞在したそうです。着いたときの印象としては、温度や湿度、景色などから日本とは違う雰囲気を感じたそうです。食事については、アメリカンサイズのステーキが美味しかったことです。訪れたビーチではスキューバダイビングや、ココナッツ割を楽しんだそうです。因みにダイビングの際、企画者である友人は体質のため潜ることができず、ずっとぷかぷか浮いていたそうです。また、些細なトラブルですが、バスの乗り間違えもあったそう。

次はトルコ旅行について話をうかがいました。

トルコへは、

- ・大学4年生の2月に1週間
- ・グアムに行ったときと同じ友達と
- ・大学卒業旅行で

行ったそうです。

なぜトルコへいこうと思ったのかというと、

・ヨーロッパやアメリカへは大人になってからでも行く機会があるかも知れないけど、中東辺りにはいこうと思わなければ行くことはないだろうと思い、せっかくだからこの機会に行こうと思った

からだそうです。

トルコにいる間に訪れた場所は、

- ・カッパドキア
- ・パムッカレ
- ・アンカラ（トルコの首都）
- ・イスタンブール

が主なところだそうです。当時トルコの東側の国で紛争が起こっていたため、トルコの西側のみを訪れたそうです。

[カッパドキア]とは、トルコ中央部の半乾燥地帯に位置する地域で、世界遺産に選ばれた地下都市があるところです。深さはなんと、65mで、8つの階に別れています。先生はここで地下ホテルに一泊したそうです。



[パムッカレ]とは、トルコ語で「綿の城」を意味し、トルコ南西部のデニズリにある自然遺産です。この地域は、流れる水によって残された炭酸塩鉱物で有名です。トルコは日本同様火山国であり、随所に温泉があり、パムッカレでも裸足になって石灰棚を歩いたり、流れる温泉に足を浸すことができます。先生も裸足で入ってみたそうです。



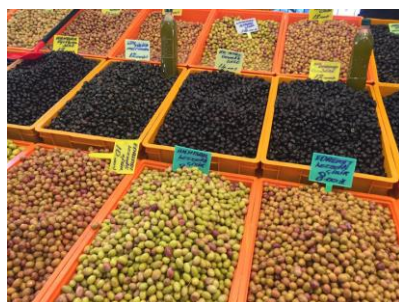
[イスタンブール]はトルコの大都市で、アジアとヨーロッパの両方にまたがる場所です。先生の印象に残っているというものが、ブルーモスクと呼ばれる、世界で最も美しいモスクと評され、1985年に世界遺産に登録された「スルタンアフメット・ジャーミイ」で、トルコ国内最大都市イスタンブールの旧市街、世界遺産歴史地区の中心エリアにあります。トルコを代表するこの寺院は、オスマン帝国時代1616年に建造されたものです。ここはステンドグラス等がとてもきれいだったと言います。



トルコで食べた料理は、

- ・キョフテ・羊のハンバーグで一つ一つは小さいがとにかくしょっぱいらしい
- ・オリーブ・朝のホテルのバイキングなどで大量にあったそう

等だそうです。先生は、トルコでの食事に慣れるまでに3日ほどかかってしまったそうです。トルコにはナザルボンジュと呼ばれるお守りがあり、いろんな家の前にかけてあったりして、お土産屋に行くと壁一面にずらっとかけてあったそうです。（先生も複数個購入しました。）またトルコは親日国として知られており、商店街などを歩くと”Hey Brother!”と呼びかけられ、現地の方々と仲良くなれたそうです。



最後に、ドイツについてお話を伺いました。ドイツへは、皆さん知っての通り、交換留学の引率として足を運んだそうです。森田先生がドイツで訪れた場所は、ドイツにある姉妹校の他には、ベルリンの壁・サンサーシー宮殿・モーリッツブルク城の三つが主なものだそうです。また、ドイツの高校を訪れたときは、向こうの校長先生と卓球で対決したり、トレーニング室で筋トレに励んだりしたそうです。



[ベルリンの壁]

言わずと知れたドイツの観光名所で、当時から残っているアートを見ることが出来ます。



[サンサーシー宮殿]

プロイセンの王「フリードリヒ」の宮殿で、世界遺産にもなっています。



[モーリッツブルク城]

湖に浮かぶ、狩猟のために造られた優雅なお城。豪華な内裏に注目です。

ドイツで食べた料理は、

- ・ カリーブルスト...ドイツで根強い人気のある料理でブルストはドイツ語でソーセージの意。
- ・ シュニッツェル...「仔牛のカツレツ」という意味だが、実際には豚や鶏も使われる。



カリーブルスト



シュニッツェル

ドイツでは様々なおもしろエピソードがあったようですが、多すぎて選べないとのことでした。

最後に

これらの海外での経験を通して自分の中で変わったことと、最後に大高生に一言伝えたいことについて伺いました。森田先生は実際に海外に足を運ぶことで、今まで遠くに感じていた海外を身近に感じられるようになり、海外に対する見方も変わったそうです。またそれも踏まえて、大高生には、色んな人や物に接して、それらを否定するのではなく自分にプラスして見識を広げ、海外旅行などを通じて国際的に活躍できるようなひとになってほしいと語ってくれました。アドバイスとして、社会人になると時間が無いから海外旅行は学生のうちに行った方が良いとのことでした。また、今回紹介した三つの中だと、トルコが、日本とは違う異国感を味わえて一番おすすめだそうです。